中国の日本語教科書における自称詞の考察
――役割語の視点から――

横浜国立大学教育学研究科　王　智毓
横浜国立大学教育学部　石田　喜美

一．問題の所在と目的

二〇一〇年代以降、日本語教育における「役割語」の機能に注目が集まっている。二〇一一年一二月に発行された『日本語教育』において、金水（二〇一一）は、日本語教育・日本語教師教育における「役割語」の必要性を提言した。従来「役割語」は、マンガやアニメに現れる特殊なスタイルとして矮小化して捉えられてきた。金水はこれに対し、「役割語が〝自然な日本語〟の一部であり、すべての日本語会話は役割（としての性質を帯びているの）である」（金水、二〇一一、三九頁）という見方を提示するとともに、「日本語教師は、学習者のキャラクタ作りを支援する立場にあり、そのことを自覚しながら指導に当たる必要がある」と指摘した（金水、二〇一一、三四頁）。この提言によって、「役割語」の積極的な機能を認めようとする動きが生まれ、現在、留学生を対象とした日本語教育において「役割語」を導入した教材・実践の開発が行われてきている（二.二参照）。

日本語学習者が、自身のセルフイメージに基づいて、日本語を使用していくことを目指すのであれば、いわゆる、唯一絶対の「正しい日本語」を教えることのみならず、日本語の多様性について知ることもその目的となる。そのため、日本語教育においては、学習者に日本語の様々なありようを伝え、学習者自身がそれを自ら主体的・創造的に使用することを支援していくことが望ましい。

本稿では、このような立場から、中国語母語話者用

の日本語教科書を調査し、その実態を報告する。これらの教科書において「役割語」という言語変種がいかに取り入れているかを確認するとともに、登場人物がいかにそれらの「役割語」を使い分けながら、「発話キャラクタ」（二．一参照）としての自分自身を示しているかを明らかにする。具体的には、「役割語」において重要な位置を占める人称代名詞およびそれに替わる語のうち、セルフイメージと深く関わる自称詞に着目し、この用いられ方を分析する。中国の日本語教科書における、「役割語」としての自称詞とその話し手のキャラクタとの関係の一端を明らかにすることが、本稿のねらいである。

二．日本語教育における「役割語」の機能

二．一　「役割語」と「発話キャラクタ」

「役割語」とは、金水（二〇〇三）によって提示された概念であり、次のように定義されている。

> ある特定の言葉遣い（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿、風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉遣いを思い浮かべることができるとき、その言葉遣いを「役割語」と呼ぶ。（金水、二〇〇三、二〇五頁）

このように「役割語」とは、それを聞くことによって、即座に、特定の人物像を想起することができるような言葉遣いのことを意味する。

定延（二〇一一）は、さらに、「キャラクタ（character）」という概念を用いることで、「役割語」とその発話者として想定されるイメージについての関係性を整理した。定延は、三つのキャラクタ概念――「ラベルづけられたキャラクタ」「発話キャラクタ」「表現キャラクタ」（注1）――を整理したうえで、「役割語」と結びついた人物像を「発話キャラクタ」であるとした（同上、一一〇―一一三頁）。つまり、「言葉がその言葉の内容だけでなく、その言葉を発する話し手のキャラクタをも暗に示す」場合、そのキャラクタは「発話キャラクタ」であるとされる（同上、一一三―一一六頁）。例えば、「そうじゃ、わしが知っておる」という言葉によって、その話し手の人物像として「老博士」がイメージされる場合、「そうじゃ」「わし」「～おる」などの言葉は「役割語」であり、これらの

「役割語」によってイメージされる「老博士」という人物像が「発話キャラクタ」であるということになる（同上、一一三―一一六頁）。

二・二　日本語教科書における「役割語」

近年では、日本語教科書における「役割語」に関する研究も蓄積されてきている。例えば、恩塚（二〇一一）は、韓国の日本語教科書における「役割語」の役割を検討した。恩塚は、教科書というものは目標言語習得のために作られたヴァーチャルリアリティであるという前提に立ち、性別を示すような言葉や表現がなくなることで日本語学習者が、登場人物のキャラクタ設定を理解できず混乱してしまうことを指摘した。そのため、日本語教育においては、学習者のレベルとニーズに合わせながら、教科書上の「役割語」を通じて、ヴァーチャルな日本語を学ぶことが必要であると述べている（恩塚、二〇一一、五一―七〇頁）。

また横内（二〇二一）は、「役割語」の観点から日本語教科書を分析し、日本語教科書に現れる「キャラクタ」が、学習者の「キャラクタ」形成に影響を与えていることを指摘した（横内、二〇二一、九二頁）。横内は、日本語学習者が自分らしい「キャラクタ」を形成するために、「役割語」を教えることには意義があると主張する。日本語教師は、教材に潜む「キャラクタ」とその「キャラクタ」に結びついた「役割語」を掘り起こすことで、学習者の疑問と真摯に向き合い、学習者に有益な取り組みを行う必要がある。

中国での「役割語」の研究としては、肖（二〇一七）を挙げることができる。肖は、現代日本語書きことば均衡コーパス（BCCWJ）を利用して、日本の現代小説における女性文末詞の使用状況の特徴を解明した上で、その結果と、中国国内で出版された『総合日本語』教科書に登場する女性文末詞との比較調査を行った。肖は、この調査結果を踏まえ、日本語の女性文末詞を単に「女性語」として扱うだけでなく、「役割語」として捉えるべきだと主張している（肖、二〇一七、六一頁）。

二・三　リサーチ・クエスチョン

このように、現在、日本語教科書における「役割語」についての研究は蓄積されてきているが、これらの多くは、文末表現のみに焦点を当てて分析を行っている。一方、「役割語」において同様に重要な位置を占める人称代名詞に焦点を当てた研究はいまだ数少な

い。しかし、人称代名詞は日本語学習者にとっては理解し使用することの難しいもののひとつであり（例えば、田中、二〇一四、五〇頁）、日本語教科書における実態を明らかにすることには意味がある。

そこで、本研究は、中国で用いられている日本語学習者用教科書のうち、二〇〇〇年代以降に発刊された教科書『新版中日交流標準日本語』シリーズに焦点を当て、これに教材として掲載されている日本語会話を分析することとした。定延（二〇一一）によれば、日本語母語話者は、「役割語」を使い分けることによって、意図的にキャラクタを切り替えることができるという。そうであるとすれば、日本語教科書内の登場人物は、いかに、自身のキャラクタを切り替えるために、「役割語」を用いているのか。これが、本研究のリサーチ・クエスチョンである。

三．方法

三・一　分析対象

本研究では、『新版中日交流標準日本語』シリーズ（唐ほか、二〇〇五、二〇〇八、二〇一二）を分析対象とする。

現在、中国国内では、主に六種類の日本語教科書が用いられている。日本語専攻の大学生向けの教科書としては『新編日語』（上海外国語大学出版社）、『新編基礎日語』（北京大学出版社）が用いられており、日本語専攻でない大学生を対象とした第一・第二外国語教育としての日本語教育においては、本稿で取り上げる『新版中日交流標準日本語』の他、『新大学日語』（高等教育出版社）、『大学日語（第二外語）』（高等教育出版社）が用いられている。一般成人向けの教科書『新版中日交流標準日本語』は、日本語を専攻しない大学生への第二外国語教育において多く用いられている（国際交流基金、二〇二〇）。また、この教科書は、大学教育のみならず、中国国内における日本語言語学校および、独学での日本語学習者にも使用されている。なお、日本語母語話者が在籍する学校では、『みんなの日本語』（外語教学与研究出版社）が用いられることもある。

『新版中日交流標準日本語』の特徴は、日本の国語科教科書出版の分野で重要な地位を占めている光村図書出版株式会社と中国の人民教育出版社との共同編集が行われている点にある。人民教育出版社が教材編纂の検討、教材内容について中国語の解説、最終的な内容審査などの業務を担当する一方、光村図書出版株式会社も教科書の作成および編集の業務を担当した。一

九八八年に『中日交流標準日本語　初級』が正式に出版され、二年後に、その中級が出版された。さらに、二〇〇〇年以後の、日本・中国における社会の変化を反映するため、二〇〇五年・二〇〇八年に『新版中日交流標準日本語　初級・中級』が出版された。さらに、日本語学習者たちの日本語能力向上のニーズを満たすため、二〇一二年には高級が出版された（人民教育出版社、二〇一八）。

『新版中日交流標準日本語』シリーズは、初級二冊、中級二冊、高級二冊の計六冊から成る。初級編では基礎的な文法・文型の練習が中心となる。そのため、登場人物の発話キャラクタを表現するような「役割語」はあまり見られない（四・一・参照）。一方、中級・高級では、初級と比べて多様な自称詞が用いられるようになる。そこで本稿では、中級二冊・高級二冊に掲載された日本語会話を分析対象とする。

中級・高級に掲載された日本語会話文に登場する主要な登場人物は、表1のとおりである。

中級のストーリーは、JC企画と竜虎酒造本社の連携事業として行われる「金星」プロジェクトを中心に展開する。初級でも、ビジネスなどのフォーマルな場でのコミュニケーションと、家庭や大学時代の友人との会話など、よりプライベートな場でのコミュニケー

表１　『新版中日交流標準日本語』シリーズにおける主要登場人物
（唐ほか，2005，2012より筆者作成）（注2）

登場人物	性別	年齢（中級/高級）	人物に関する説明
森健太郎	男	33/43	日本の広告代理店、JC企画の上海支社長。本社勤務時代の同僚の小野緑（のちの森緑）と結婚。
小野緑／森 緑	女	32/42	旧姓小野。上海で日本語教師として働く。李（佐藤）秀麗はJC企画時代の同僚。
佐藤光一	男	31/41	竜虎酒造本社海外事業部本部長。上海事務所時代に知り合った李秀麗と結婚。
李秀麗／佐藤秀麗	女	30/40	旧姓李。日本で小さなコンサルティング会社を経営。森家とはずっと交流を続けている。
森徹平	男	14	森家の長男、上海の日本人学校に通う。中学校2年生。バスケットボールが得意。
森瑛士	男	10	森家の次男、上海の日本人学校に通う。小学校5年生。森家のムードメーカー。
佐藤望	女	7	佐藤家の長女。小学校1年生。明るくて、とても活発。音楽と動物が大好き。

ションの両方が取り上げられていたが、中級では、それら両者を結びつけるような中間的な場が登場する。このような中間的な場は、佐藤光一（以下、光一）と李秀麗（以下、秀麗）との恋愛・結婚を主軸としたストーリーのなかで登場する。例えば、光一が秀麗に告白を行う場面（㈤㈥）がこれに当たる（四・二・三参照）。

高級のストーリーは、中級のストーリーの続編にあたり、その一〇年後のストーリーが展開する。ストーリーの中心となるのは、森家（森健太郎・森緑・森徹平・森瑛士）と佐藤家（佐藤光一・佐藤秀麗・佐藤望）の二つの家庭である。森家と佐藤家の関係は親しく、特に、秀麗と森緑（以下、緑）と森健太郎（以下、健太郎）の三人は、ＪＣ企画で同僚であったこともあり、現在も親友である。

三・二　分析方法

本稿では、『新版中日交流標準日本語』中級・高級に登場する男性登場人物が、いかなる自称詞を用いているかを分析・考察する。男性登場人物を取り上げる理由は、本教科書の初級では、女性登場人物は「わたし」しか使用しないからである。それに対して、男性登場人物の会話では、後述するように「わたし」と「ぼく」の使い分けが見られる。

定延（二〇一一）は、発話キャラクタを、〈私たち〉タイプと〈異人〉タイプに分類する。〈私たち〉タイプとは現代日本語（共通語）社会に含まれる住人であり、〈異人〉タイプとは、宇宙人、動物など人間以外の物、外国人、地方人、古代人など自由にでっち上げられる外部世界の住人である。さらに〈私たち〉タイプは、「品」「格」「性」「年」という観点で分類できる（表２）。

本研究では、『新版中日交流標準日本語』にみられる日本語会話を、これら「品」「格」「性」「年」という観点から分析する。

表２　＜私たち＞タイプの分類（定延，2011，p.131-160 に基づき、筆者が整理）

観点	観点の説明	具　体　例
品	文化的制約から逸脱せず、慎み深くありながら、その制約を感じさせないこと	「上品」「下品」
格	経験や力や地位などから総合的に醸し出されるもの	「別格」「格上」「格下」「ごまめ」
性	性別に関する伝統的な通念・期待	「男性」「女性」
年	発話キャラクタの年齢	「老人」「年輩」「若者」「幼児」

四．結果

四．一　『新版中日交流標準日本語』シリーズで用いられる自称詞の概要

まず、『新版中日交流標準日本語』シリーズで用いられる自称詞の全体像を確認する。中国国内で用いられる他の日本語教科書と比較して、『新版中日交流標準日本語』では、「役割語」としての人称代名詞が積極的に導入されている。表3は、中国で使用されている日本語教科書六社のうち、『みんなの日本語』『新編日語』『新版中日交流標準日本語』それぞれの初級における自称詞の出現回数を整理したものである。

表3　中国の日本語教科書における自称詞の出現回数（回）

教科書名	自称詞	
	わたし	ぼく
新版中日交流標準日本語	23	7
新編日語	78	2
みんなの日本語	9	1

『みんなの日本語』は他と比べて、自称詞が出現する回数が少ない。これに対し、日本語専攻の大学生向けに用いられている『新編日語』は、自称詞の出現回数が他の二つと比べて圧倒的に多いものの、そのほとんどは「わたし」であり、男性の用いる自称詞「ぼく」は全八〇回中二回しか登場しない。一方、『新版中日交流標準日本語』は他と比べて、「役割語」としての人称代名詞を積極的に導入しようとする姿勢が見られる。『新版中日交流標準日本語』の中級・高級において、男性登場人物はさらに多様な自称詞を使用する（表4～表7）。

四．二　自称詞の使い分けによる「発話キャラクタ」の表現

四．二．一　ビジネスコミュニケーションにおける自己の表現――「品」の使い分け

金水（二〇一一）は、用いられる言葉の「品」と、社会地位・教育程度、地域、性差、年齢・世代との間に関連性があることを指摘する。例えば、社会的地位・教育程度が低い人に対して高い「品」の話し方が期待されることは少ない。一方、性別に関していえば、女性は男性よりも、高い「品」の言葉を用いることが期待される（金水、二〇一一、七―一六頁）。

複数の企業による共同プロジェクトを軸にストーリーが展開される中級では、ビジネスの場を舞台とした日本語会話が多く掲載されており、それらの会話の中

表４　『新版中日交流標準日本語』森健太郎による自称詞の使用状況

森健太郎	自称詞	相手	場面・分析
男性 中級：33歳 高級：43歳 日本の広告代理店、JC企画の上海支社長。本社勤務時代の同僚の小野緑（のちの森緑）と結婚。	わたし	鈴木	高級で取引先の支社長である鈴木とゴルフに出かける。ビジネスの場で相手の前で行儀正しい、「上品」なキャラクタを表現する。
	ぼく	佐藤光一	高級で森家と佐藤家は一緒に旅行する。妻の友達の夫である佐藤光一に向かって、やや距離感を抱いている「ぼく」を使用し、相手と自分に同じ「格」を取り入れる。
	ぼくら	佐藤光一	高級で森家と佐藤家がレストランで話している。同上。
	おれたち	森 緑（小野緑） 佐藤秀麗（李秀麗）	高級で遠くから、緑・秀麗に向かって呼びかける。それぞれの妻である女性の前に、自分たちが「格上」であることを示す。
	お父さん	森瑛士	高級で健太郎と息子は食事の後片付けをする健太郎を息子の徹平が手伝う。家族内の役割として子供の目線から「お父さん」と自称する。

表５　『新版中日交流標準日本語』佐藤光一による自称詞の使用状況

佐藤光一	自称詞	相手	場面・分析
男性 中級：31歳 高級：41歳 竜虎酒造本社海外事業部本部長。上海事務所時代に知り合った李秀麗と結婚。	わたし	王風	中級で会社の顔合わせ会で、共同事業先の担当者である王風と会話する。相手先企業の担当者に対して、より「品」の高い表現を選ぶ。
	わたし	アナウンサー	中級でイベントにテレビのインタビューを受ける。佐藤光一は会社の担当者として、ビジネスのフォーマルな場で「上品」な言い方を選ぶ。
	私たち（3回）	本社の上司と社員たち	中級で日本の本社で「金星」中国のプロジェクトを報告する。本社の上司と同僚の前に、ビジネスの場で、より「上品」な「わたしたち」を使用する。
	ぼく	李秀麗	中級で李秀麗は落ち込む光一を慰める。プライベートな場で同僚として李秀麗に向かって「ぼく」を用いる。「おれ」よりやや丁寧な言い方を使用する。
	ぼく（6回）	李秀麗	中級で李秀麗に自分の気持ちを伝える時、「ぼく」を使う。また二人の関係は親密になるため、やや弱めの男性性を提示し、知的な自己を表現している。
	ぼくたち	森健太郎	高級で森家と佐藤家がレストランで話している。佐藤光一と森健太郎はお互いにやや距離感を抱いている「ぼく」を使用し、相手と自分に同じ「格」を取り入れる。
	おれ	金本	中級で佐藤光一と親友の金本と一緒に食事をする。友人同士のプライベートな場面でお互いに「下品」な「おれ」を用いて、男性的な自己像をアピールし、相手との距離が近いことも表現する。
	おれ（2回）	佐藤秀麗（李秀麗）	高級で仕事の後、2人きりで食事をし、レンタルビデオショップで会話をしている。佐藤秀麗とのこの上ない親密さを表現する。

表６　『新版中日交流標準日本語』森徹平による自称詞の使用状況

森徹平	自称詞	相手	場面・分析
男性 年齢：14歳 森家の長男、上海の日本人学校に通う。中学校２年生。バスケットボールが得意。	ぼく	佐藤光一	高級で森家と佐藤家は動物園へパンダを見に行く。家族以外の佐藤光一に向かって、「ぼく」を使用し、「児童」として自己を表現する。
	おれ	森健太郎	高級で家族と一緒に夕食を食べる。徹平は親の前に、「おれ」を使って、大人になりかけた「若者」としての自己を表現する。より戦略的な側面が含まれる。

表７　『新版中日交流標準日本語』森瑛士による自称詞の使用状況

森瑛士	自称詞	相手	場面・分析
男性 年齢：10歳 森家の次男、上海の日本人学校に通う。小学校５年生。森家のムードメーカー。	ぼく（３回）	森健太郎 森　緑（小野緑）	高級で家族と一緒に夕食を食べる。瑛士は親の前に「ぼく」を使って、常に「児童」として認識される。
	ぼく（３回）	森　緑（小野緑）	高級で母の日に緑は楽しく過ごすために夕食を用意する。同上。
	ぼく	佐藤光一	高級で森家と佐藤家は動物園へパンダを見に行く。瑛士は親の友達である佐藤光一に対して、「ぼく」を自称する。同上。

で、男性登場人物は自称詞「わたし」を用いる。ビジネスコミュニケーションにおいては、より「上品」な「わたし」を使用することで、社会地位・教育程度の高い、「品」のある社会人というキャラクタを表現しようとするのである。

例えば、光一は、中級に登場する男性同士の会話において「わたし」と「おれ」を次のように使い分ける。

㈠事例一

光一：紹興ですか。一〇年前に、一度だけ行ったことがあります。

王風：そうですか。

光一：ええ。わたしにとっては、初めての海外旅行でしたが、紹興で飲んだ紹興酒の味は今でも覚えていますよ。

（中級・第三課「顔合わせ」、五四頁より一部抜粋）

㈡事例二

金本：何だって？　おれなら、その場

で「お引き受けします」って答えるぞ。サラリーマンにとって、出世はいちばん大事なことじゃないか。

光一：確かにそういう考え方もあるだろう。でも、おれはそうは思わない。まだ、中国でやりたい仕事が残ってるんだ。失敗しても、慰めて、勇気付けてくれる人もいるし…。

（中級・第三一課「栄転の話」、三〇二頁より一部抜粋）

このうち、事例一の場面は、光一が、会社の顔合わせ会で、共同事業先の担当者である王風と会話する場面である。これから共同で事業を行っていく相手先企業の担当者に対して、光一は、より「品」の高い表現である。「わたし」という自称詞を選択的に利用している。

一方、事例二の場面は、友人同士でのプライベートな会話場面である。ここで光一は、自らも「おれ」を用いる金本に対して、同じく「おれ」という自称詞を用いる。この場面では、金本と光一の間に意見の対立が起きており、議論を戦わせている。ここでは、より「品」の低い表現を選ぶことで、会話相手である友人と距離の近い人物であることを表現するとともに（注3）、より男性的で、自分の意見を譲らない自己像をアピールしていると考えられる。

なお中級で、光一が「ぼく」を使用する場面もある。これについては、どちらも会話の対象となる相手が女性（秀麗）であることから、「性」の側面からその使い分けを検討する（四.二.三参照）。

四.二.二　男性性を示すことによる「格上」の表現
――「格」の使い分け

「格」は、経験や力、地位などから総合的に醸し出されるものである（定延、二〇一一、一四〇頁）「格」は「別格」「格上」「格下」「ごまめ」という四類に分けられるが、本稿では、このうち「格上」「格下」のみに焦点を当てて考察する。

中級・高級において「格」が問題になるのは、上司ー部下の関係や、取引先との関係など、ビジネスコミュニケーションにおける上下関係が顕在化する場面のみではない。定延（二〇一一）が、「男は女よりも格が上」と説明するように（定延、二〇一一、一四五頁）、むしろ、男性ー女性という関係のなかで、「格」の側面を反映した言葉の使い分けが行われる。

例えば、森健太郎（以下、健太郎）は、家族間の懇談場面において、友人（秀麗）の夫・光一に対して「ぼく」を用いるのに対し（㈢）、男性集団（夫集団）―女性集団（妻集団）という関係になった際には、自称詞を「おれたち」に変化させる（㈣）。

㈢事例三

光一：そう考えると、子供は、いつのまにか大きくなるもんですね。

健太郎：ええ。ぼくも同じことを考えていましたよ。

（高級・第二二課「我が子とパンダ」、一五八頁より一部抜粋）

㈣事例四

（緑と秀麗に向かって、遠くから声がかけられる）

健太郎：おれたち、腹、ぺこぺこ。

（高級・第二二課「日本で再会」、一四〇頁より一部抜粋）

事例四の場面で、健太郎は光一とともにおり、遠くから、それぞれの妻（緑・秀麗）に向かって呼びかける。このとき使用されるのが、「おれ」の複数形である「おれたち」であった。また、ここで健太郎が述べる「おれたち、腹、ぺこぺこ。」は、助詞の省略やオノマトペの使用が見られるなど、他の会話と比べて、幼児性のある甘えた印象を与える。事例二において、光一は、より「品」の低い「おれ」を用いることで男性的な自己像をアピールしていたが、事例四において、健太郎は、女性集団に対し、幼児性の高い表現――それは、「年」の低さゆえの「品」の低さを想起させる――とともに、「おれ（たち）」を用いることで、自分たちが「格上」であることを示している。

四・二・三　性別規範を前提とした戦略的な自己表現――「性」の使い分け

すでに見てきたように、「性」は、「品」および「格」と深く結びついている（定延、二〇一一、一四五頁）。具体的には「男は女よりも格が上、女は男よりも品が上」というものである（同上）。そのため、あえて「品」を下げた表現をすることで、男性的な自己をアピールすることができる（㈡㈣）。一方、「男は女よりも格が上、女は男よりも品が上」であることを前提にしながら、異なる「性」のありかたを示すこともできる。中級・高級における光一の発言の中には、相手

との関係性を変化させることを意図したような、戦略的な自称詞の使用が見られる。

四.二.一で見てきたように光一は、ビジネスの場においては「わたし」、友人同士とのプライベートな関係のなかでは「おれ」を使用しているが、中級ではこの他に「ぼく」を使用する場面も登場する。以下の二つの会話である。

(五)事例五

秀麗：どうしたんです、そんなに沈んだ顔をして。

光一：あっ、李さん。どうしてぼくがここにいることが分かったんですか。

（中級・第二〇課「希望の灯」、六六頁より一部抜粋）

(六)事例六

光一：李さんとの思い出を忘れるわけがありません。この公園でぼくを励ましてくれたこと、香港の夜景を眺めたこと…。李さんは、ぼくにとってずっと頼りがいのある仕事仲間でした。そして、今、ぼくにとっていちばん大切な人だ。あなたが倒れたあの時、はっきり分かったんです。

秀麗：…佐藤さんが日本に発ってから、わたしも毎日あなたのことが気になって仕方がありませんでした。本当に仕事どころじゃなくて…。

光一：大阪で、ぼくなりに考えました。ぼくたちの思い出はまだ一年分でしかない。ぼくは李さんと、この上海でもっとたくさんの思い出を作っていきたいんです。これからもあなたの隣にいていいですか。

（中級・第三二課・「思い出の場所」、三二五頁より一部抜粋）

光一は、共同事業のパートナーであるJC企画の職員・秀麗に対しては、それまで、自称詞「わたし」を用いていたが、事例五においてはじめて「ぼく」を用いた。また、二人の関係がより親密になる事例六では、六回も「ぼく」が登場する。光一にとって、自称詞「ぼく」は、秀麗との関係をより親密なものとするために、戦略的に選ばれた自称詞のようだ。金水（二〇一四）によれば、「おれ」が強い男性を帯びる一方、「ぼく」は相対的に弱い男性性を示すという（金水、二〇一四、六五頁）。また、「ぼく」は知的な人物に用

いられ、「おれ」は野性的な人物に用いられる傾向があるという（同上）。これを踏まえると、ここで光一は秀麗に対して、強い男性性をアピールせず、むしろ、その男性性を弱めたかたちで提示するとともに、知的なキャラクタを表現しようとしていることがわかる。

中級においては、このように光一が秀麗に対して用いる自称詞が「わたし」から「ぼく」へと変化する。さらに高級では、結婚後、妻となった秀麗に対し、光一が「おれ」を用いる場面が登場する。以下の場面は、高級・第五課「久しぶりのデート」の日本語会話の抜粋である。第五課のタイトルにも示されるように、この場面は、結婚一〇年後の光一と秀麗が、久しぶりに二人きりの時間を過ごす場面である。仕事の後、二人きりで食事をし、レンタルビデオショップで会話をしている。

(七)事例七

秀麗：まだ八時か。どうする？

光一：おれはもう一杯飲みたい気がするんだけど…。

（中略）

秀麗：お店のオススメは、『初恋のきた道』、『あの子を探して』かあ。張芸謀監督の作品が多いね。

光一：日本でもずいぶん前からファンが多いからね。おれも好きだなあ。張芸謀監督って、中国でも人気なんでしょう？

（高級・第五課・「久しぶりのデート」、七六頁より一部抜粋）

事例五・六で見てきたように、光一は秀麗との関係において「ぼく」という自称詞を選択的に使用してきたが、この場面では秀麗に対して「おれ」を用いている。前述した金水（二〇一四）の説明を踏まえれば、ここで光一は秀麗に対し、この上ない親密さを表現していると言えるだろう。

結婚の一〇年後を舞台とする高級において、光一・秀麗と健太郎・緑がどちらも「お父さん」「お母さん（ママ）」と自称したり、「お父さん」「お母さん」と呼びかけられたりする場面が多く登場する。常に家族内の役割によって子供の目線から自己を表出することが存在するなか、「久しぶりのデート」の中で、光一が「おれ」を選択的に使用することは、「お父さん」－「お母さん」という家族内役割ではなく、男性－女性という関係にある自己を表出する戦略といえるだろう。

このように、光一による一連の会話には、自身が表現したいと望むキャラクタを表現するために、「おれ」と「ぼく」を戦略的に使い分けている姿を見ることができるのである。

四・二・四　「若者」としての自己／「幼児」としての自己の表現――「年」の使い分け

「年」は発話キャラクタの年齢であり、「老人」、「年輩」、「若者」、「幼児」の順に四つに分類される。（定延、二〇一一、一五一―一六〇頁）。本稿では、「若者」と「幼児」に注目して考察する。

高級に登場する男性登場人物のうち、未成年者（子供）にあたるのは、一四歳の森徹平（以下、徹平）と一〇歳の森瑛士（以下、瑛士）である。瑛士がすべての会話において自称詞「ぼく」を用いるのとは対照的に、徹平は、「ぼく」と「おれ」を使い分ける。

徹平は、森家の夕食をする際、その場にいた健太郎に向かって、「いいの？　やった！　おれ、ドリブルの練習したいな。」と発言する。一方、第二二課で森家・佐藤家でとも動物園にパンダを見に行く際には、健太郎と光一に対し、「ぼくは、あんまり乗り気じゃなかったんだけど…。」と発言する。森家・佐藤家のメンバーがいる状況でありながら、発言を向ける相手・内容によって、「おれ」「ぼく」を使い分けているのである。

瑛士の自称詞が、相手や状況によって変化せず、全て「ぼく」であることによって、瑛士は「児童」として認識される。瑛士の自称詞の使用において「品」「格」の要素はほとんど考慮されず、彼の発話キャラクタは、「年」という側面のみで表現されているのだ。

これに対し、徹平の自称詞使用は、より戦略的な側面が含まれる。彼は常に「児童」であるわけではなく、「おれ」を使うことで「若者」としての自己を表現しようとする。金水（二〇〇三）の調査によると、幼い頃から「ぼく」を使用していたにもかかわらず、中学生くらいになると自称詞「おれ」に変えたと述べる学生が存在するという。徹平は、一四歳であり、この学生と同様、「ぼく」から「おれ」への過渡期にあるという解釈も可能である。そのような中、動物園でパンダを見に行くという、より「児童」としてわがままな振る舞いが期待される場面では「ぼく」を用いて自己主張をし、一〇代の若者らしい活動（バスケットボール）を認められた際には「おれ」を用いることによってそこで提示された「若者」としての自己を肯定的に受け止める。このように、徹平にとって「おれ」

と「ぼく」を使い分けることは、「若者」としての自己を表現するか、「児童」としての自己を表現するか、という問題と結びついている。

五．まとめと今後の課題

本稿では、中国国内で使用されている日本語教科書『新版中日交流標準日本語』の中級・高級を分析対象とし、そこで見られる男性登場人物の日本語会話を事例としながら、そこに見られる「役割語」が会話の中でいかなる機能を果たしているかを分析してきた。「品」「格」「性」「年」の観点から、自称詞に着目して教科書の男性登場人物の「発話キャラクタ」を明らかにしてきたが、そこから言えることは以下の通りである。

・成人男性はビジネスコミュニケーションにおける場では、より「品」が高い「わたし」を用いることで「格上」のキャラクタを表現する。

・成人男性が、プライベートな場でより「品」の低い「おれ」を用いる事例が二例登場する。一つは、気のおけない男性を相手により男性らしく強いキャラクタを表現するケースであり、もう一つは、成人男性が集団で女性集団に対して「おれ」を用いる場合である。後者の場合、男性集団はより「品」の低い「おれ」を用いることで、女性集団に対して「格上」なキャラクタをアピールしている。

・男女関係において、男性は戦略的に「知的」なキャラクタ「ぼく」と「野性的」なキャラクタ「おれ」を使い分けている。

・一〇歳の児童は「年」という観点からのみ自称詞を用いる。具体的には、「ぼく」を用いて、「児童」のキャラクタを表現する。

・一四歳の少年は「おれ」もしくは「ぼく」を用いて、「若者」キャラクタと「児童」キャラクタを選択的に表現する。

以上、本稿では『新版中日交流標準日本語』の男性登場人物が、自称詞を使い分けることによって、場面によって異なる自身のキャラクタを表現していることを明らかにしてきた。このように、『新版中日交流標準日本語』の編集においては、登場人物同士の会話において「役割語」への配慮がなされている。これらは、中国の日本語学習者に、日本語における「役割語」の存在や機能に気づくきっかけを提供するものと考えられる。

もちろん、本稿で分析したのは、ある特定の教科書の日本語会話例に過ぎない。しかし、このような視点で、教科書においていかなる「役割語」が用いられているかを明らかにしていくことは、日本語学習者自身のセルフイメージの構築に資する日本語教育を考える上で重要である。現在、中国では、『新版中日交流標準日本語』のほかにも、多種類の日本語教科書が存在する。それらの教科書には多数の日本語会話例が記載されているが、その中で、「役割語」とキャラクタ表現性との関係についての説明・解説を付与したものはほとんどない。そのため、それらの日本語会話例に用いられた「役割語」とその機能を明らかにするとともに、それらの研究の蓄積を踏まえて、教科書に付与する「役割語」の説明・解説のありかたを議論していく必要がある。これについては、今後の課題とする。

注

1　「ラベルづけられたキャラクタ」とは、言葉そのものがキャラクタを直接に表すもので、たとえば、ある男性について、その人物がたとえ年輩でも「あの人は〈坊っちゃん〉だ」などと評する場合の〈坊っちゃん〉などのような言葉を意味する。また「表現キャラクタ」は動作を表現する語句がその動作を行うキャラクタまでを暗に示す場合を示す。例えば、「たたずんでいる」という表現を用いることによって、その人物がそれなりの雰囲気を備えた〈大人〉キャラであることが示される場合などである（以上、定延二〇一一、一一二頁）。

2　森徹平・森瑛太および佐藤望は、高級のみに登場する。そのためこの三人については、高級登場時の年齢のみを示した。

3　二〇二一年一二月に発行された『三省堂国語辞典』（見坊ほか、二〇二一）では、「おれ（俺）」について、「自分をさす、かなりくだけた言い方。親しい同等・目下の人や、家族に対して言う」（見坊ほか、二〇二一、二一六頁）と説明している。このことから、「おれ」を使用することで、相手と気の置けない、親しい間柄にある者としての自己を表現しうると考えられる。

引用文献

独立行政法人国際交流基金（二〇二〇）『二〇一八年度日本語教育機関調査結果』https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2020/china.html（参照二〇二一年〇一月〇六日）

金水敏（二〇〇三）『ヴァーチャル日本語：役割語の謎』岩波書店
金水敏（二〇〇七）「『役割語』研究と社会言語学の接点」『社会言語科学会第一九回大会発表論文集』、三五九―三六一
金水敏（二〇一一）「役割語と日本語教育」『日本語教育』一五〇、三四―四一
金水敏（二〇一四）『〈役割語〉小辞典』研究社
見坊豪紀・市川孝・飛田良文・山崎誠・飯間浩明・塩田雄大（二〇二一）『三省堂国語辞典』、第八版、三省堂
恩塚千代（二〇一一）「韓国の教科書における役割語の役割：「生きた日本語」を教えるバーチャルリアリティー」金水敏（編）『役割語研究の展開』第四章，ころしお出版社、五一―七〇
人民教育出版社（二〇一八）「記念『中日交流標準日本語』出版三〇年 https://www.pep.com.cn/xw/zt/hd/br30/brhg/201806/t20180619_1925752.shtml（参照 二〇二一年〇一月二五日）
定延利之（二〇一一）『日本語社会のぞきキャラくり』三省堂
肖錦蓮（二〇一七）『日语教材中句尾女性语的研究』［修士論文］北京外国語大学
田中優輝（二〇一四）「日本語学習者の自称詞の使用形式と男女差：留学生を中心とした調査から」『ことば：研究誌』三五、四九―六四
唐磊・張敏・劉粉麗・李家祥（編）甲斐睦朗・西尾珪子・宮地裕（監修）（二〇〇五）『新版中日交流標準日本語 初級 上下』、第二版、人民教育出版社・光村図書出版株式会社
唐磊・張敏・劉粉麗・李家祥（編）甲斐睦朗・西尾珪子・宮地裕（監修）（二〇〇八）『新版中日交流標準日本語 中級 上下』、第二版、人民教育出版社・光村図書出版株式会社
唐磊・張敏・劉粉麗・李家祥（編）甲斐睦朗・西尾珪子・宮地裕（監修）（二〇一二）『新版中日交流標準日本語 高級 上下』、第二版、人民教育出版社・光村図書出版株式会社
横内美保子（二〇二一）「役割語から日本語教科書を見直すと「優等生キャラ」が見えてる：日本語学習者のキャラクタ・カスタマイズの重要性と教師の役割」『ことばの研究』一三、七七―九四